

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

Contents

● 15年をふりかえって		P 2
● 自然と親しむ会報告		P 4
● セミナー・写真展報告		P 4・5
● 春のワーキングツアーご案内		P 5



黄土高原写真コンクール大賞受賞作(今津偕子さん撮影)

2007.1

113

認定特定非営利活動法人 緑の地球ネットワーク

15 年をふりかえって

高見 邦雄 (GEN 事務局長)

大同における緑化協力事業のスタートは 1992 年 1 月ですので、16 年目です。正直なところ、いまのように発展するとは思っていませんでした。つぎつぎに障害にぶつかって、いつつぶれてもおかしくなかったのです。あのころのことが夢なのか、いまが夢なのか、はっきりしなくなることが私にはあります。

ここまでこれたのは瀬戸際で助けがあったからです。なかでも忘れられないのは 1995 年、まさに存亡の危機で、立花吉茂先生が代表を引き受けてくださったこと。これでなんとか生き延びられると、泣きながら夜道を辿った記憶がいまも鮮明です。

それでも順調にはいきませんでした。その直後に阪神大震災があり、多くの関係者が被災しました。でも、あのときの救援活動が私たちに生命をくれたのです。ネットワークの世話人はじめメンバーの多くが救援活動に取り組んで、信頼と結束を深めました。ボランティア活動や NPO に社会の関心が高まったのも助けです。

中国でも協力相手に恵まれたことのほかに、流れに乗ったのです。私たちが協力をはじめたころ、緑化のスローガンは盛んですが、実態はお寒いものでした。日本からボランティアツアーが訪れて木を植えるとき、子どもや村人は熱心でも、幹部は横でただみている、はなはだしきは座り込んでTRAN

プをはじめることさえあったのです。

大きな転機は 1998 年の長江の大水害でした。人びとの環境への意識が高まり、中国政府も翌年の年頭、全国生態環境建設計画を発表し、環境プロジェクトがつぎつぎにスタートしました。これは本気だなと私は感じましたし、各級の幹部の態度にも変化が生じました。私たちの協力事業は一足先

にスタートしていたため、実体以上に評価され、大切にされるようになったのです。それがまた現場の人たちの励みになり、自覚と責任感が強まりました。

協力プロジェクトでは植えた木が生育期を迎えています。あちこちで一斉に。マツなんか地上部 15cm ほどの小苗を植えますから、最初は写真にも写らないし、まだるっこしいほど伸びません。6～7 年目から生育のいいものは 1 年に 50cm も伸びて、倍々で緑が濃くなります。たとえていえば 2 年で 4 倍、4 年で 16 倍というペース。

小学校付属果樹園のアンズもつぎつぎに収穫期を迎えました。収入の向上、環境の改善、教育支援といくつもの効果をあげて村の人に喜ばれています。

このような成果をみることができるのも 15 年間つづけたおかげ。皆さんのご尽力に心から感謝いたします。

全体的にみて中国の環境問題はますます深刻化しています。環境問題は形を変えた貧困問題で、経済が発展し貧富の格差が拡大するとき、貧しいところにしわ寄せがいきます。高度成長の初期、日本でも水俣病やイタイイタイ病が発生しました。あのころの日本とおなじ現象が大規模かつ深刻



「水…明日もまだあるのだろうか」深刻化する中国の環境問題

に中国で発生しつつあると私は感じています。隣国日本も影響を避けられないでしょう。

さいわい中国でも私たちの協力事業はしだいに注目されるようになりました。現場のプロジェクトを充実させるのとあわせ、私たちの経験と成果を発信することに力をいれたいと思います。「広大な中国のこと、あなたたちが何をやろうとどれほどの効果があるの?」とよく言われました。当然だと思います。それにたいして私たちは「呼び水の作用」を訴えてきました。なんとかそうありたいものです。

「この活動は 20 年は継続します」とスタート時に中国で約束したのは最初の協力団団長でネットワーク顧問の石原忠一さんです。横でききながら私は「まいったなあ。明日つぶれてもおかしくないのに」と思っていました。なのに 4 分の 3 をすぎました。75 点。それだけみればりっぱな合格点ですが、まだまだやりたいこと、やるべきことが残っているという気がしています。



やっと写真映えがするようになったマツ。

ボーナスカンパへのお礼と 今後のご協力をお願い

会報「緑の地球」第112号(2006年11月15日発行)にボーナスカンパを呼びかけましたところ、個人、団体、企業から、1月10日までに3,903,807円のご協力をいただきました。

カンパの内訳は、カササギの森へ1,055,000円、サポート基金(仮称)1,060,000円(うちかけはしの森90,000円、白登苗圃80,000円、環境林センター10,000円、小学校付属果樹園450,000円、指定なし430,000円)、緑化基金1,340,000円、運営カンパ448,807円です。ご指定のように使わせていただきます。

また、新たに会員に入会いただいたのは9名です。

たいへんありがとうございます。ひき続きのご協力をよろしくお願いいたします。

サポート基金は、大同での活動を将来にわたって支える基盤づくりに大切な役割をはたすものですが、いそいで概要を決めたため、呼び名もまだ仮称です。次回の世話人会(2月3日)で決定しますが、いいアイデアがあればGEN事務所までお知らせください。

緑の地球ネットワークの会員は現在約650個人・団体です。まだ会員でないみなさんの入会をお待ちします。入会・ご寄付等、下記のようにご協力を

お願い申し上げます。

緑の地球ネットワークは国税庁長官の認定により2005年6月1日より認定NPO法人となりました。緑の地球ネットワークにご寄付いただくと税制上の優遇が受けられます。

また、郵便振替の際は、極力自動振替機をご利用いただくようお願いいたします。GENが負担する手数料を節約することができます。

●会費(年額1口。会費には会報購読料が含まれます。)

一般	12,000円
家族(2人目から)	6,000円
学生(高校生以上)	3,000円
ジュニア(中学生以下)	1,000円
団体	12,000円
賛助	100,000円

●会報購読料 年間 2,000円

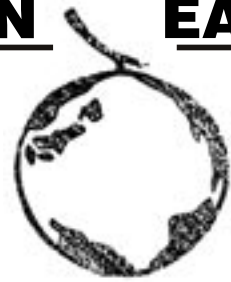
●緑化基金 中国黄土高原緑化活動にあてます(2割までを国内管理費)。金額自由

●運営基金 国内管理費にあてます。金額自由

●カササギの森協力費 1ha緑化5年分費用。1口50,000円

●サポート基金 new!!

大同の拠点の管理・運営にあてます。
◇環境林センター◇霊丘自然植物園



財政的に自立できるまで、まだ支援が必要です(写真は白登苗圃)

◇白登苗圃◇かけはしの森
各1口10,000円

☆認定NPO法人に寄付すると

個人の場合は、寄附金額-5,000円が所得金額から控除され、この分には所得税が課税されません。

法人の場合は、一般の寄附金算入限度額とは別に同額の損金受入限度額が設定され、この分には法人税が課税されません。

相続財産を寄付した場合は、申告期限内であれば寄付した金額は相続税等の対象となりません。緑の地球ネットワークへのご協力のうち、緑化基金、運営資金、会費のうち2口以上の部分と賛助会費のうち12,000円以上の部分が寄附金控除の対象となります。

黄土高原写真コンクール

応募作品集CD できました

昨年、たくさんの方にご参加いただいた黄土高原写真コンクール。長らくお待たせしましたが、応募作品をおさめたCDをなんとか年内に完成、参加いただいたみなさま、協賛いただいたみなさまにお送りすることができました。応募規定より多くお送りいただいた写真や、事務局秘蔵(?)の写真もくわえて、収録作品数は300点をこえます。ご希望の方には、送料込み500円でおわけしますので、GEN事務所までご連絡ください。



助成金決定

ありがとうございます

●(財)イオン環境財団

中国山西省大同市における小学校付属果樹園建設に、130万円の助成が決められました。



GEN 自然と親しむ会報告

大野山アルプスランドで自然観察と里山体験

横田 毅 (GEN 会員)

昨年 11 月 12 日、NPO 法人ひょうご森の倶楽部のみなさんといっしょに、大野山で自然観察と間伐作業をしてきました。参加者は 23 人。肌寒いなか、間伐の初心者からベテランまで、山の空気を楽しんできました。

午前 8 時半に JR 川西池田駅北口に集合、そこには見慣れた GEN 会員の顔があった。

5 台の車に分乗し、猪名川町柏原の「山の駅」を目指す。途中から時雨空になり、1 時間程走り「山の駅」に着く。空気がひんやりしている。この辺は市街地より 2、3 度気温が低い。そこで温かいコーヒーをいただきながら、今日の体験をご指導いただく「ひょうご森の倶楽部」の会員の皆さまとも顔を合わせ、森林組合長(?)さんから柏原地区の概要を説明いただく。



動いているうちに暖かくなってきた

しばらく小休止の後、ふたたび車に分乗し大野山頂上を目指し、10 分ばかりで山頂小屋に着く。昼食までは 1 時間ほどしかないので午前中は自然観察をすることになり、3 班に分かれ「ひょうご森の倶楽部」会員の方に説明してもらい、里山の植物を観察して廻った。この日は雨模様のうえ高地(頂上 753m)だったので手がかじかむほど寒かった。近くの山も紅葉が始まりかけていた。晴天であれば遠く日本海も見えとか。

山頂小屋で昼食をとる。温かいお茶がお腹に沁み透った。

午後からは、里山の整備作業をすることになった。まずストレッチ体操で身体をほぐした後、ヘルメットとのかごり、木鋏を受け取り作業現場へ出向く。里山の整備されたところと未整備のところを見せていただく。一目瞭然その差が分かる。

いよいよ作業に取り掛かる。2～3m 間隔で雑木を切り倒す。

普段使わない筋肉を使うので、あまり一気に力をいれないよう注

意を受けるが、みんな一生懸命作業をする。寒かった身体がすこし暖かくなった。1 時間ばかり作業したところで雨が強くなり作業は中止となったが、みんなもっと続けたいようであった。それでも結構雑木林が綺麗になった。やはり山も手を入れないと駄目なのだということがよく分かった。

この里山にはあちこちの小学校の植樹記念碑があり、小学生も植樹に来ていることが分かったが、小学生の時から里山の植樹体験をすることは、森(林)に対する関心を持たせるうえで本当にいいことだと思う。

道具類の手入れをし、今日の作業は終わった。その後山頂小屋で今日の感想を述べることとなった。このような作業は初めてという人が多かったが、いずれの人もまたこんなことをしたいと言っていた。私自身は、他のところで山林の間伐を経験しているので、その楽しさは分かっていたが、やはりまた来たいと思った。

このあと、天文台で天体観測をすることであったが、天候不順のためプラネタリウムを見て、天体の面白さを経験した。寒いところから暖かいところへはいったので、少しくつらうつらした。

帰途、山の駅で地元の方が我々のために野菜類を格安で販売してくださり、皆それぞれ好きなものを買って、いただいた柿を土産に帰途に着いたことであった。

報告 JICA 地球ひろばセミナー・写真展 世界が直面する砂漠化～中国での防止の試み

つなげたい～実践する人たちの輪
宮下 利江

のりがよくイキもいい女性が 3 人集まれば、ことはあっさりと簡単に決まるものです。後から高見さんはじめ事務局のみなさんに心配させるなんてことは露ほども考えず JICA 地球ひろばの気持ちのいいテラスで「できるよね。」「うん大丈夫。」「じゃ、やりましょう。」とものの 30 分でこのイベントの実施は決まったのです。JICA の担当者から「砂漠緑化の、特に中国・アジアに関わる

団体とはなぜか今まであまりご縁がなくて。」ということばかりはじまりいろいろなことが手探りだった今回のイベントでした。が、予想以上の盛り上がりを見せた要因にはさまざまな形で参加して下さった 20 名以上のボランティアの方をはじめ、セミナー来場者や写真展を見た人などこのイベントに関わった多くの方にあったいくつかの共通項だったように思います。それは世界への、環境への、中国への、あるいは自分以外の他者(人も生

き物も)への関心とそれを具体的にしていく力、実践していく力を持つ方が集まられたことです。そしてそれが積





極的に柔軟に発揮されたことです。最終日、後片付けも終わり最後に残ったものは「この広場の企画ではこれまでで一番の盛り上がりでしたよ。こんなに人が集まった秘訣はなに？」というJICAの方の言葉と、人と人をつなぐ細くゆるい糸がひろがったという確信です。これはきっかけ。みなさん、またおもしろがってやりましょう。

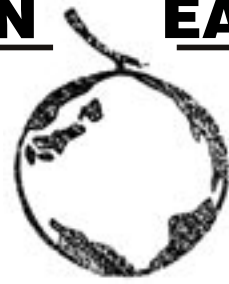
問題の深さ・長さを実感

藤 沼 淳一

体育館としても使われるような大きな会場に並べられた260の椅子が、雨降りだったにもかかわらずほとんど埋まりました。遅れて会場に到着した参加者は席を探すのに一苦労だったようです。老若男女問わず多様な参加者に恵

まれました。(環境問題、NGOというキーワードは依然として色あせていない、と実感)。セミナーでは始めに、GEN立ち上げから現在に至るまでの黄土高原の様子や思い出話を高見さんが写真を使って報告しました。続いて、明日香壽川先生が、参加された黄土高原のワーキングツアーの様子を写真を使って紹介されました。その後は中村英さんの絶妙な進行で緑化に限らず、中国の石炭・エネルギー・水・人口問題、世界的な環境問題、温暖化問題など、黄土高原の話題から派生する様々な社会問題に関してほとんど脈絡も無い感じで、思いつくままに討論が展開されました。高見さんのフィールドからの情報と、明日香先生の体系立った情報が上手く補完して、迫力のある内容の討論になりました。セミナーの最後には会場から時間がオーバーするほどたくさんの質問も出されて、今後の黄土高原や環境問題全体の展望に関して議論されました。

セミナーを通して、黄土高原に見る問題は、人間1人の力では太刀打ちできない根の深い問題であり、人間1人の命では足りない息の長い問題でもあるのだということを改めて感じました。



写真展・講演報告

JICA地球ひろばでの写真展、セミナーにつづいて、11月後半には日本経団連自然保護協議会と世界銀行情報センターの主催で、緑の地球ネットワークの活動を紹介する写真展示がおこなわれました。また11月28日にはコーヒーアワーで高見事務局長が活動紹介をおこないました。

12月12日には日本経団連関西事務所の環境の集いがあり、緑の地球ネットワークも会場で写真展示の機会をもらいました。自然保護協議会の大久保尚武会長(積水化学工業(株)社長)は講演のなかで大同を訪れたときのことにも触れられました。高見事務局長も最後に即席の報告をしました。

CSR(企業の社会的責任)の角度から私たちの活動に注目する企業も増えているようです。



2007年春の黄土高原ワーキングツアーご案内

欧米は暖冬で、ワシントンでは桜が満開だと報じられていましたが、今年桜より気になるのが大同のアンズの開花状況です。

植樹や村での交流、農家でのホームステイ、GENの協力拠点訪問などいつものGENのワーキングツアーのお楽しみ以外に、今回は満開のアンズを楽しんでいただこうと例年より日程を遅らせました。一度アンズの花を見てみたいと思っていた方、開花期予想が当たることを祈りながら、いまから予定しておいてください。

なお、前号でご案内したものから、費用が変更になっています。燃油特別付加運賃の変動幅が大きく、予想できないためです。燃油特別付加運賃と航空保険料があわせて1万円程度かかると思われるので、あらかじめご了承ください。

- 日時：2007年4月17日(火)～24日(火)7泊8日
- 訪問地：中国山西省大同市(北京経由)
- 費用：一般＝17万円、学生＝16万円(国際航空運賃、

中国国内での交通費/食費/宿泊費、GEN年会費を含む。空港施設使用料、航空保険料、燃油特別付加運賃、個人行動時の費用、旅券取得費用は含まない。変更になる場合があります)※中国国際航空利用 ※関西空港発着 ※成田利用・北京合流希望の方はご相談ください。

- 定員：30名(先着順)
- 申込み締切：3月12日(定員に達し次第締め切ります)
- 問合せ・申込み：GEN事務所までご連絡ください。応募書類を郵送します。



黄土高原史話〈33〉

「大夫、勃然として色を作し」

谷口 義介（摂南大学教授）

B.C.87年、武帝71歳で崩御。あとを嗣いだのは63歳のときできた末子で、即位時わずか8歳の昭帝。この少年皇帝を支えるべく遺囑を受けたのが、二十年余そば近くに侍っていた霍光・金日磾・上官桀の3人です。光は身長168センチと中肉で色白、日磾は容貌厳として体軀雄偉、桀は無双の怪力、と。

天子の側近を内朝といい、皇帝と皇室を守るのが役目なので、武帝はこの3人に後事を託したわけ。ところが、昭帝即位して一年余、万事ひかえめだった日磾が病死してから、残る二人のあいだの雲行きが怪しくなる。光の娘が桀の息子に嫁ぎ、生れた女の子つまり共通の孫娘（8歳）が昭帝（12歳）の皇后に立てられる、という関係なのですが。

一方で武帝は、漢にとっての懸案は外征による財政破綻の建て直し、と認識。そのころ卑賤とされていた商人出身で、長く経済官僚として専売制を実施、物価調整策をとってきた桑弘羊を御史大夫（副首相格）に昇進さす。ときの丞相は人は善いがボンクラ老人の田千秋、毒にも薬にもならぬとて、そのまま続投。丞相府・御史大夫府などを外朝と呼び、国家の運営に当たります。

内朝と外朝は、いわば車の両輪。武帝としてはうまい人選をしたつもりが、

昭帝即位早々に両者の確執が激しくなる。権力争いも絡みますが、表立っては政策論争。B.C.81年2月、宮中で、世にいう塩鉄会議が開かれます。

各地より有識者六十余人が推挙・参集、民間の疾苦するところを諮問され、現行の政策を廃止すべきか否か、当路の者と大激論。国家が民と利を争う塩・鉄の専売などもっての外、という民間業者の意向を受けての発言です。これに対し、有司を代表して出席したのは桑弘羊、みずから立案施行してきた財政政策の継続を主張するが、有識者の方も執拗に反論、いくたびか御史大夫を激怒さす。

「大夫、勃然として色を作し、黙して応へず。」（前漢・桓寛『塩鉄論』）

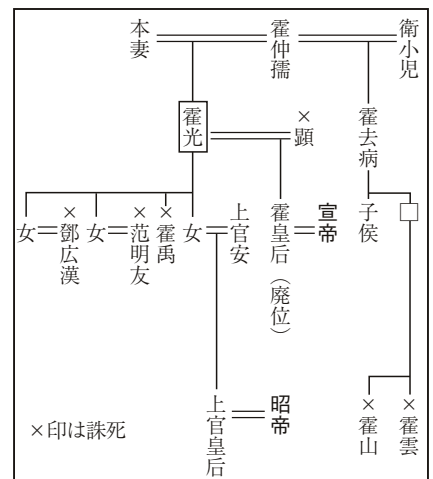
しかし前者は一介の知識人、儒教的農本主義の信念ありとはいえ、実質首相たる権力者にかくも堂々と意見を述べれるものなのか。実はその背後に内朝の実力者霍光が控えている、とみたのは郭沫若『塩鉄論読本』序文。さすが郭氏は読みが深い、単なる書齋の学者ではありません。

すなわちこの会議、内朝の霍光が外朝の桑弘羊に仕掛けた奪権闘争にほかならず、第二次攻撃はその翌年起的燕王旦の謀反事件。これに連座したかどで、桑弘羊・上官桀らは粛清される。

霍光かくして全権を掌握、B.C.68年に死するまで、揺るがぬ地位を保ちます。しかしその2年あと、霍氏に帝位を奪う意図ありと、一族皆殺しの運命に。

ところで、塩鉄会議そのものの結果はどうなったか。廃止されたのは酒の専売制だけ、他には全く手がつけられず。塩・鉄の官営化は手っ取り早く国家の財源を確保する方法、誰がトップにすわろうとも、簡単には手放せなかったものでありましょう。しかして、袁清林（久保卓哉訳）『中国の環境保護とその歴史』にいう。

「国家が統一的に山海園池を管理する政策は、生物資源が破壊されることを防ぎ、乱伐、乱獲の抜け穴を塞ぐことになって、環境保護には有効な政策であった。」（318ページ）



霍氏族誅関係系図

この人 この人

富樫 智さん（中国）

ご無沙汰しております。GENのみなさんお元気でお過ごしのことと思います。2000年には本当にお世話になりました。あの狭かった事務所でみなさんと弁当を食べたのが懐かしいです。世話人の方も温かい人ばかりで家族のようにはしてもらいました。

その後は（財）オイスカで緑化事業に携わり、今は大同より西に900km離



れた内蒙古阿拉善盟で阿拉善沙漠生態研究研修センターを設立し、現地の人たちと沙漠化防止の植林植草事業に着手しています（妻には迷惑かけっぱなしです）。ここは年間降雨量が200mm以下で、灌木や草本を主体とした植林植草を進めています。特に春先になると3日に1日は砂ぼこりの舞う天気

です。植えた後に羊やラクダが入って食べていることもありましたが、最近は禁放政策によって少なくなりました。

今はGENでの経験はとても心強い経験になっています。もし、この経験がなければ、あきらめが先にたってしまったかもしれません。人間が生きている短い時間軸の中では、油断をすれば転覆してしまいます。先が見えなくなったり、180度違う結果をもたらし可能性もあります。

今やっていることは、横綱の足下のアリのようだと思うときがあります。本当にちっぽけです。だからこそ成功を追い求めるのではなく、失敗を受

植物屋のこぼれ話 (続編) その 11

立花 吉茂 (GEN 代表・花園大学客員教授)

●沖縄の馴化栽培

先月号にアクリマチゼーションのことを書いたら、沖縄での馴化栽培に悪戦苦闘している現状をお知らせしたくなった。

沖縄で住むようになって (毎月1/3ほど) からすでに4年目になるが、気候、風土がこんなにも違っているのかと驚かされている。沖縄で植物を栽培するのに問題になるのは毎年のごとくやってくる台風ぐらいかな、と思っていたらとんでもないことなんだ、と気がつくのに3年もかかってしまった。それは、沖縄の冬は裏日本と同じなのである。12月～3月に西高東低の冬型気圧配置になると裏日本は曇天、降雨または降

雪になるが、ここ沖縄では雪は降らないが曇天、雨天になるのである。朝鮮半島を通らず大陸から直接寒気が東シナ海を越えて水蒸気をもたらし、雲が発生し雨が降る。だから、冬の日射量が大阪よりも少ないのである。本土より温度が高いから植物は冬でも育つが、光合成が十分できないから、メロンは栽培できず、パイナップルやスイカを育てても全然おいしくない。よく育つのは葉を食べるキャベツやハクサイなどだけである。

●熱帯の北限・温帯の南限

沖縄市にある東南植物園に勤めていた友人の仲田実さんは「ここは熱帯の北限だから熱帯植物はどんどん集めな

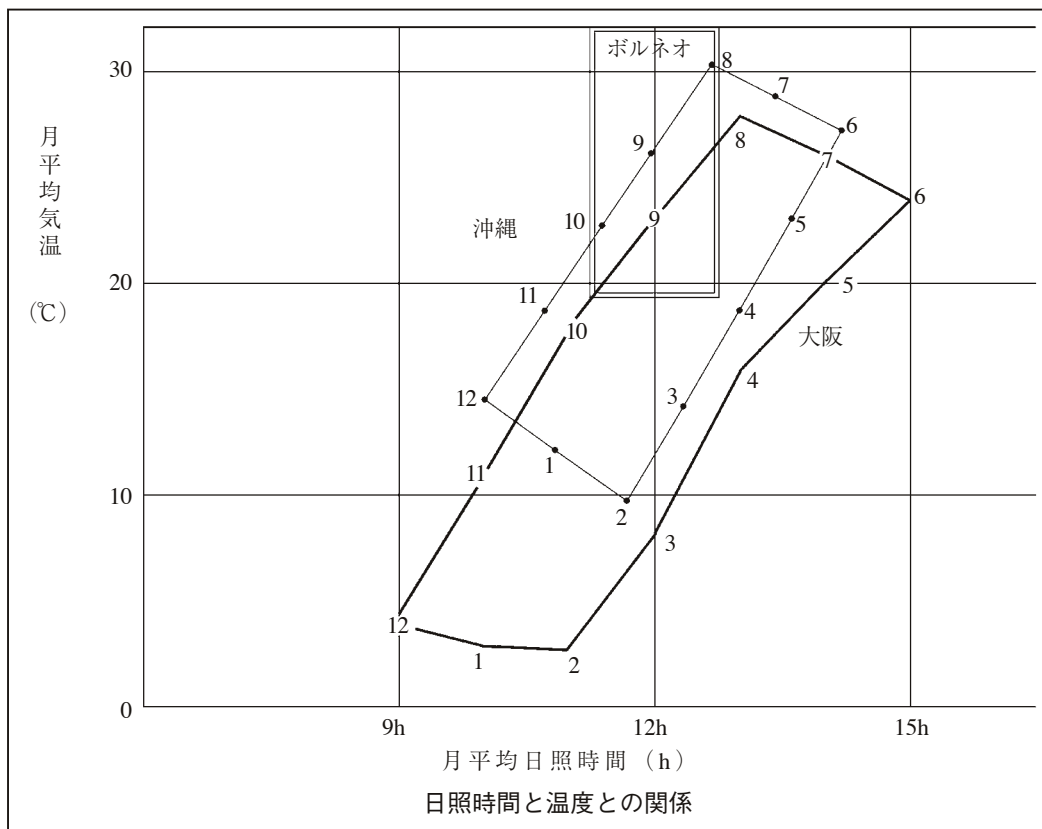
きゃいけませんね」と私に話したが「同時に温帯の南限でもありますね」とやりかえして握手したのは去年のことでした。沖縄本島と隣の伊平屋島は瀬戸内海の海岸地帯にたくさん生えているウバメガシの南限地帯であり、スダジイ、ツバキが生い茂っていてカキ、ウメ、サクラがよく育つのだからまさに温帯だし、ヤシ類、バナナ、パパイヤが育つのだから熱帯でもある。ここにいろいろな植物を持ち込んで馴化させようと努力しているのが現状なのだが、冬の裏日本的気候には苦しめられている。もうひとつの問題は土壌だ。この小さな島に4種類の性質の違った土壌が入り混じっていて実に複雑である。私の住む今帰仁村の諸志という場所は海岸に近いから隆起サンゴ礁の土壌でアルカリ性、その土を通ってくる水道水はかなり強いアルカリ性だ。ミスト装置

を設置して挿し木しているが、ツツジ、ツバキは1年経っても発根しないで、葉の表面に石灰が白く付着したようになっている。家から200メートルも山手に行くともう中性から弱酸性の赤土に変わる。

●日照と日射

世間では日照時間と日射時間を混同しているのややこしいが、ここではっきりさせておこう。日照時間は日の出から日没までの時間であり、これは永久に変化はない。変化があるのは日射時間である。雲がでたり、高い建物が南側に立つと日光が遮られて日射時間は減る。前者は花芽分化など植物の繁殖器官に影響するが、後者は光合成に影響するから栄養生長に関係し

てくる。私が沖縄に持ち込んだ植物で、ムクゲの品種、キョウチクトウの品種があまり花を咲かせないのだが、これは日照時間が沖縄と本土では違うからである。ここでもアクリマチゼーションが必要なのだ、と感じはじめているところである。



✓ け入れながら一歩ずつ続ける必要があるのかなと思います。今は現地の大学院へ通いながら実証確認をしています。大きく前進しているとはいえないかもしれませんが、その分、期待や喜びも大きいです。GENの皆さんもお忙

しいと思いますが、お身体に気をつけてお過ごしください。

【オイスカアラ善砂漠生態研究プロジェクトのHP】http://www.geocities.jp/oisc_aalashan/index.htm 【アラシヤン通信ブログ】<http://blog.goo.ne.jp/alashang/>

情報ひろば
いっしょなかたち

世界につながる国際協力のお祭り
ワン・ワールド・フェスティバル

- 日時：2月3日（土）10時～17時・4日（日）10時～16時
 - 場所：大阪国際交流センター（大阪市天王寺区上本町8-2-6、近鉄「上本町」駅徒歩5分、地下鉄「谷町9丁目」駅徒歩10分）
 - 入場無料
 - 主催・問合せ：ワン・ワールド・フェスティバル実行委員会（大阪市港区築港2-8-24 pia NPO 2階・関西国際交流団体協議会内、Tel. 06-4395-1124 Fax. 06-4395-1125 e-mail : one-fes@interpeople.or.jp http://www.interpeople.or.jp/owf.html）
- NGO、NPOやODA実施機関、企業などの活動紹介や、さまざまなワークショップ、シンポジウムなど、今年も企画は盛りだくさん。詳しくはホームページをご参照ください。

*当欄掲載のイベント情報は掲載時点のもので、その後変更になる可能性があります。主催者にお確かめのうえ、ご参加ください。
*当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月15日ごろの発行で、締切は前月の末です。なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

第15回 松下幸之助 花の万博
記念賞贈呈式・講演会

- 日時：2月17日（土）14時～16時40分（13時30分開場）
 - 場所：リーガロイヤルホテル大阪2階「山楽」の間
 - 入場無料、定員200名（申込み先着順）
 - 主催・申込み・問合せ：（財）松下幸之助花の万博記念財団〈花の万博記念賞事務局〉Tel. 06-6909-0235 Fax. 06-6906-4124 e-mail : hanahaku@gg.jp.panasonic.com
 - 申込み方法：郵便番号、住所、氏名（ふりがな）、年齢、所属、連絡先を明記してFAXかメールで上記まで。折り返し参加証が送付されます。
- 【講演】
“セーターを着る植物、温室をつくる植物”－ヒマラヤの高山植物の魅力－／大場秀章さん（東京大学名誉教授）
“柿洪の文化をたどって”－学ぶこと、

伝えたいこと－／今井敬潤さん（岐阜女子大学非常勤講師）
“ありふれた植物こそおもしろい”／芹沢俊介さん（愛知教育大学教授）

編集後記

暖冬と思っていたら台風より強烈という“爆弾低気圧”襲来、地球温暖化の現れかとちょっと不穏なお正月でした。今年もよろしく願いいたします。
いきなりですが、05年度のGENの事務所費1,587,733円。家賃・共益費・光熱費等。どうしたら家賃がただなのに事務所費がン千万になるのか、会食費や別の事務所の経費まで入るのか、政治の世界は不思議です。「法律に違反してない。恥ずかしいことはしてない」って、ただ単に法律がザルなだけじゃないですか。こんな政治家が国務大臣で、そのトップは「美しい国」をつくろう、としきりとおっしゃる。政治家の言動が美しくないんですけど。（東川）